

第 276 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2013 年 6 月 6 日(木) 18 時 30 分~20 時 00 分

場 所: 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 川瀬 知之 氏(新潟大学医歯学系歯科基礎移植再生学分野・准教授)

タイトル: 歯周組織再生療法の最前線

---GTR、GBR に最も効果的な材料と方法---

再生医学・医療の頂上を iPS 細胞や神経再生とすると、歯周再生は裾野といえるかもしれない。しかし、もつとも国民に届いている再生医療であり、QOL 向上に大きく貢献している。これを支えているのが生体材料であり、その進歩が治療法の進歩を牽引していることは言うまでもない。

今回は基礎科学的な見地から個々の歯周再生治療用生体材料の特徴を見直し、現在の臨床使用法が適切かどうか再検討するきっかけとして活用いただけるような内容にしたいと考えている。具体的には、自家骨、HAp や β -TCP などの人工骨(骨充填材)、GTR 膜、エナメル基質蛋白(EMD)、同種骨由来の脱灰凍結乾燥骨(DFDBA)を中心に再評価を試みる。また、PRP (PRF)や培養骨膜シートをもちいた細胞治療については、われわれ自身の最新データならびに国の描いている再生医療の将来像を含めて解説したい。

医療には「リスクがベネフィットを上回ってはいけない」という大原則があり、医薬品・医療機器認可のうらには「有効性よりも安全性のほうを重視する」という原則がある。しかるに、その程度や解釈は国によって開きがある。FDA の認可を受け、アメリカ国内では広く支持されている医薬品・材料のなかには、日本ではなかなか認められないものがある理由の一端はここにある。国内の関連産業を振興させる立場の経産省の戦略やアメリカの対日要求や TPP のことを考えると「じつは流行は作られている」傾向も垣間見えてくる。

あくまで科学的データに評価の根拠を求めつつも、しかしこのような国や企業の世界戦略の実態も頭の片隅において、個々の生体材料の本質を理解する姿勢を維持することが重要である。

略歴

昭和 60 年 新潟大学歯学部卒業
昭和 61 年 新潟大学歯学部助手
平成 3 年 マイアミ大学医学部博士研究員 (～平成 5 年)
平成 4 年 新潟大学歯学部講師
平成 5 年 新潟大学歯学部助教授
平成 9 年 カンザス大学医学部客員准教授 (～平成 10 年)
平成 11 年 日本歯科大学新潟生命歯学部非常勤講師 (～平成 24 年)
平成 24 年 日本歯科大学新潟生命歯学部客員教授
平成 25 年 九州大学大学院歯学研究院非常勤講師

主な所属学会

日本再生医療学会 (評議員)、日本歯周病学会 (評議員)、日本薬理学会 (学術評議員)、日本バイオマテリアル学会 (一般会員)、日本歯科保存学会 (一般会員)、Tissue Engineering and Regenerative Medicine International Society (一般会員)

担当:硬組織疾患制御再建学講座 宇田川 信之